

保 育

異年齢交流を通して4歳児の人とかかわる力を育てる

中山 芙 充 子

1 はじめに

幼児期は、家庭における保護者との関係だけでなく、園生活を通して他の人々の存在に気づき、かかわりを求めるようになり、人とかかわる基礎を培う時期である。だからこそ幼児期には、人と人がふれあったり、かかわりを深めたりする多様な体験が求められている。しかし近年、少子化の進行などから異年齢児のかかわりが少なくなり、地域社会の中での縦の関係で遊ぶことが見られなくなってきた。幼稚園教育要領解説(2008)では、このような少子化状況を踏まえ、「幼稚園において、異年齢の幼児同士が相互にかかわり合い、生活することの意義は大きい」¹⁾とし、幼稚園で、異年齢交流を通して人とかかわる力を育てる意義を述べている²⁾。

このような情勢の中、昨年度、5歳児に焦点をあてて異年齢交流の研究を行った。この研究から、5歳児は、3・4歳児との異年齢交流を通して、思いを伝え合う経験をし、そこで身に付けた人とかかわる力を5歳児同士のかかわりの中でも発揮していくことが分かった。また、互いに認め合うことの大切さを学ぶとともに、やさしさや思いやりの心も育まれることが明らかになった³⁾。

その上で、このような5歳児に向けて、異年齢交流の中で、4歳児の人とかかわる力はどのように育まれていくのか。またその力をより豊かに育てるために、教師はどのようにかかわればよいのだろうかと考えた。

4歳児は、集団での遊びが広がり、仲間の中で自分のよさに気づいていく時期である。また、5歳児の姿に「お兄ちゃんお姉ちゃんみたいに自分もやってみよう」という憧れの気持ちを強めるの

も4歳児である。かつこいい5歳児の姿にわくわくするような気持ちがさらに、4歳児同士を結びつけていく。そしてときには、3歳児たちに自分たちの姿を見せることで、小さい子から憧れられていることを実感できると、子どもたちの意欲は高まる。このように5歳児と3歳児の間である4歳児だからこそ、「①ちょっと背伸びをして、年上の5歳児に憧れる関係」「②自分がお兄ちゃんお姉ちゃんになって世話をしたり、導いたりできる年下の3歳児との関係」、そして「③対等にぶつかったり、活動や思いを共有できる4歳児同士の関係」の3つの関係が可能になる年齢なのである⁴⁾。

しかし本園の異年齢児とかかわる4歳児の様子を見ていると、5歳児を見て憧れの気持ちをもってはいるが、5歳児に圧倒され遊びに入れぬ姿もある。3歳児に対しては、教えてあげたいという思いはあっても、かかわり方が分からずどうしてよいか戸惑う姿もある。このような異年齢児へかかわるときの躊躇する気持ちや戸惑いなどの葛藤を乗り越えていく過程で、4歳児自身が自己中心的なものの見方や態度から、他者を理解しようとする態度を身につけ、人とかかわる力をより高度なものにしていくと考える。

そこで、本研究では、5歳児、3歳児との異年齢交流を通して、4歳児の人とかかわる力を育むための環境・援助について明らかにすることを研究の目的とする。

2 4歳児の人とかかわる力とは

本研究では4歳児の人とかかわる力を次のようにとらえている。

“4歳児の人とかかわる力”とは、自分の思っていることを言葉や態度で相手に伝えたり、相手の思いを聞いたりする力。また、相手の思っていることに気づく力ととらえている。

4歳児は、言葉とともに、言葉を補うために態度で表すことも多く見られる。そのため、言葉だけでなく表情やからだの表現などの態度で思いを伝えている姿も大切にしたい。また、思いを伝えるという一方向だけのかかわりではなく、人とかかわる中で、相手の思いに気づくことも大切にしたい。相手の気もちに気づくということは、自分の立場だけでものごとをみるのではなく、相手の立場にたつてものごとをみることや相手の気もちを自分のことのように感じることに通じている。そして、その気づきは、相手の思いや考えを受け入れられるようになるための大事な一歩であると考える。

4歳児でこのような力を育むことで、5歳児では、相手の思いを受け入れながら、互いの存在を認め合っていくことができるようになっていくと考えている。

3 幼稚園の異年齢交流とは

本研究では、幼稚園での3・4・5歳児の異年齢交流について以下の3点を押さえて考えている。

○ 自然な交流

幼稚園の好きな遊びの時間では、それぞれがやりたい遊びをみつけて遊んでいる。同じ場で一緒に生活しているとそれぞれの遊びの流れがありながら、互いの遊びに興味をもち自然に出会いが生まれる。その出会いを異年齢交流の機会として生かしていく。

○ 意図的な交流

好きな遊びの時間に自然に発生してきた遊びや互いの興味関心を生かしながら、異年齢の教師が連携をとり、交流する場を設ける。

○ 人とかかわる力の育ちの場

多様な人やものごとと出会い、思いを伝えたり気づいたりして得た体験が、また新たにかかわってみよう、伝えたい、という気もちにつながっていく。

4 研究の方法

(1) 対象児

年中組 4歳児24名 (男児11名 女児13名)

(2) 対象児が交流を行う異年齢の幼児

年長組 5歳児39名 (男児19名 女児20名)

年少組 3歳児28名 (男児15名 女児13名)

(3) 観察期間・場面

平成25年6月から7月、9月から12月

好きな遊び・まとまった活動の時間における異年齢交流及び同年齢での活動の中で、子ども同士がかかわり合っている場面。

(4) 方法

4歳児が異年齢交流で友だちとかかわる様子を実践事例として書き起こす。この実践事例を用いて本園で実施している教師7名を対象にした保育カンファレンスと4歳児の担任自身による事例の考察を行う。その中で、教師の環境・援助が適切であったかを検討するとともに、よりよい環境・援助を明らかにする。

5 実践事例

実践例1 「落ちない泡づくり」(7月)

<背景>

園庭で4歳児と遊んでいると5歳児がやってきて「見て！ひっくり返しても落ちないよ」と泡の入ったボールをひっくり返して見せる。すると4歳児から「本当じゃ！泡が落ちん！」と驚きの声があがる。「教えてあげよっか？」という5歳児の言葉に、4歳児から「やってみたい！」という声が出る。

このことを5歳児の担任にも伝え、学年別だっ

た石けん遊びコーナーを合体し、4歳児と5歳児が一緒に泡づくりができる環境を用意した。

①「新しい環境にかかわり、5歳児に落ちない泡の作り方を教えてもらう」

次の日、合体した石けん遊びコーナーには、4・5歳児が興味をもって集まっている。するとA女（4歳児）が「Aちゃんも、落ちない泡、作りたい」と教師に言いに来る。やってみたいという思いはあるが、5歳児がたくさんいるので、躊躇して始められずにいるようだ。そこで、教師も寄り添ってコーナーに行き「Aちゃんも、落ちない泡作りたいんだって。どうやって作るんだろうね」と言っていると、「こっちにおいで。お姉ちゃんが教えてあげる」と言ってB女（5歳児）が入るスペースを開けてくれる。すると、A女（4歳児）の表情が明るくなり喜んで間に入っていく。

誘ってもらったことで勇気が出たのか、「どうやるん？」とA女（4歳児）がB女（5歳児）に聞くと、「水をちょっとだけ入れるんよ。こっち」と水道のところまでA女（4歳児）を連れて行き、ほんの少し水を入れ「これくらい。ちょっとだけよ」と教えている。それをA女（4歳児）は、うなずきながら真剣に聞いている。一緒に机に帰ると「今度は、石けんはいっぱい削って入れるの」とすりおろし器と石けんを手渡す。A女（4歳児）は、教えてもらった通りに、一生懸命削っては、泡だて器で混ぜることを繰り返す。その中で「よくなってきたね」とB女（5歳児）に褒められてA女（4歳児）も嬉しそうである。

しばらくすると、「先生！見て！」と2人で教師のところに駆けてくる。すると、「せーの！」と声をそろえてボールをひっくり返すと見事に落ちない泡ができていた。「うわあ、泡が落ちないね！Aちゃん（4歳児）、お姉ちゃんに教えてもらって、作れるようになったの？」と聞くと「うん！Bちゃん（5歳児）がね、教えてくれた！Aちゃん（4歳児）もできた！」とうれしそうに言う。その後、近くの友だちにも「見て見て！」と2人一緒に見せに行く姿が見られた。

【考察】

事例①のように、年上の5歳児に対しては、緊張し自分の思いを出すのに時間がかかる姿ややってみたくても躊躇する姿が見られる。そのため、教師は、A女（4歳児）のやりたいという思いを受け止めながら、コーナーと一緒にいき「Aちゃん、落ちない泡つくりたいんだって。どうやってつくるんだろうね」と泡づくりをしている5歳児たちに問いかけることで、5歳児と4歳児のかかわりが生まれ、教え合いに発展していった。

このように、年上の5歳児とのかかわりで、躊躇してかかわれない4歳児がいる場合には、やってみたくて思いを大切に寄り添いながら、安心してかかわったり思いが出したりできるようなかかわるきっかけづくりをしていくことが大切であると考えられる。



図1 ひっくりかえしても落ちないよ！

②「同年齢の友だちの状況に気づき、5歳児に教わったことを自分なりの方法で伝える」

次の日もA女（4歳児）は、友だちと一緒に石けん遊びコーナーで落ちない泡づくりを始める。

そんな中、「泡がかたまらん。なんでなん・・・」と急にC女（4歳児）が涙目になった。そんな様子に気づいたA女が「どうしたの？」と声をかけると、「泡がかたまらん・・・」とC女は言う。「落ちない泡、したいの？」とA女が聞くと、C女は「うん」とうなずき「でも、できんの。いっぱい石けん入れたのに」と言い、とうとう泣き始めてしまう。すると、A女はC女のボールを覗き込み、「水が多いんよ。水はちょびつとなんよ」と言う

と、新しいボールを持って水道に走って行き、ボールに少し水を入れて帰ってきた。「ほら。ちょびつとでしょ」と言ってC女に見せると、「これでやってみ。できるよ」とボールを渡す。C女は、涙を拭いて石けんを削り始める。

すると、みるみるうちに泡が固まり始める。C女の涙はピタリと止まり、「固まってきた!」とうれしそうに言う。その言葉にA女は笑顔になり、「ほらね。水、ちょびつとだったら、できたでしょ?」と得意げに言う。教師は、「本当だ!固まってきたね。Cちゃん、よかったね。Aちゃんが作り方教えてくれたおかげだね」と言うと、C女が「Aちゃん、ありがとう」と笑顔で言う。すると、A女は照れたように笑いながら、「いいよ」言う。その後も、互いに見せ合いながら落ちない泡を繰り返し作っていった。

【考察】

事例②では、5歳児に教えてもらったことを同じように同年齢の友だちに教える姿が見られた。その際、A女(4歳児)は、友だちの困っている様子に気づき、5歳児に教えてもらったことを同じようにC女(4歳児)に伝えていった。友だちのために考えて行ったことを教師が認めると、A女(4歳児)は照れながらも喜んでた。このように、異年齢の5歳児に教えてもらったことを4歳児同士のかかわりで発揮できるように、教師が4歳児なりのかかわり方をあたたかく見守り認めていくことで、自信をもってさらにかかわってみよう、思いを伝えてみようという意欲を育むことが大切である。

事例①②では、5歳児の担任と連携を図りながら、学年別だった石けん遊びコーナーを合体することで、自然に5歳児が4歳児に教えたり、4歳児は5歳児のまねをしながら遊び込んでいったりする姿が見られた。このように、5歳児のより豊かな遊びに刺激を受けて、やってみたいという気もちをもてるように、異年齢でのかかわり合いが自然に起こるような環境構成の工夫を行うことが大切である。

実践例2 「“あきまつり”をいっしょにしよう!」

(10月中旬~11月中旬)

<背景>

10月に、4歳児が5歳児の作っている段ボールの部屋を見に行ったことから、「年長組さんみたいに作ってみたい」という憧れの気もちが膨らみ、真似をして自分たちも段ボールで秘密基地を作り始める。その中で、5歳児が段ボールカッターの使い方のコツや作り方を4歳児に教えるなど、自然にかかわり合いながら作る姿が見られ、「年長組さんと一緒にやってみたい」という声があがる。そこで、遊戯室で4歳児と5歳児の遊びを合体した“あきまつり”の活動が始まった。

①「5歳児に教えてもらいながら問題を解決する」

D男(4歳児)とE男(4歳児)が、ドングリ転がしに興味をもち、牛乳パックでコースを作っている。最初は、1人で作っていたコースをそれぞれ合体し、どんどん長いコースになってきた。ところが、実際にドングリを転がすと、途中でどんぐりが飛び出し、それ以上進まない。「グラグラしとる。もっとがっちりガムテープでとめたらいいのかな」とD男。E男と一緒にガムテープを貼っていくが、やはり飛び出してしまふ。それを見ていた5歳児が「この外側がうまくつながっていないから、飛び出すんよ。ここにテープ貼ってみたら?」と教えてくれる。「そっか!」とD男がガムテープを貼ろうとすると、5歳児も貼りやすいように牛乳パックをそっと支えてくれている。何度か貼り、頑丈につなぐことができた。そして、実際に転がすと見事に最後まで転がり、「やったー!」と大喜びする。その後、5歳児がトンネルや看板をつけてくれて、さらに素敵なドングリ転がしとなっていった。

【考察】

これまでの異年齢交流では、4歳児が5歳児の考えた遊びに参加させてもらい、お客さんの扱いはなってしまうことが多かった。しかし、“あきまつり”では、5歳児の考えた遊び場で遊ばせ

てもらっただけの受け身の関係だけではなく、4歳児も自分のしたいことを、5歳児とかかわりながら存分に楽しめるように、それぞれ興味をもって進めている遊びを持ち寄り、合体していった。この過程では、遊びの内容や活動の流れを4・5歳児の教師間で何度も話し合い交流を進めていった。

このことで、4歳児は自信をもって遊びを進めながら、自然な異年齢でのかかわりが生まれていった。そして、4歳児は、5歳児に優しく接してもらったり、教えてもらったりし、人への安心感を持ち、より遊びが楽しくなっていた。このような4歳児が5歳児に優しくしてもらった嬉しさから「あんな5歳児になりたいな」という憧れの気持ちを育んでいくために教師が互いの気持ちを伝え、つないでいくことが大切である。



図2 ここをつなげてみよう！

実践例3 「さくら忍者ランドでござる！」

(11月下旬～12月上旬)

<背景>

11月に、年長組とあきまつりを一緒にしたり、年長組のランドに招待してもらったりしたことをきっかけに、「ぼくたちも、さくら組でランドをやってみよう！」という声があがる。

ちょうど忍者に興味をもっていただけもあり、「“さくら忍者ランド”を開いて、もも組さん(3歳児)を招待しよう！」ということになり、クラス全員で相談し、次の5つのコーナーを作ることになった。

- (1) 蜘蛛の巣トンネル
(トンネルの中に、白いゴムを張り巡らせる)
- (2) おばけボーリング
(おばけの的を手裏剣で倒す)
- (3) 忍者食堂
(修行中おなかがすくと、忍者飯が食べられる)
- (4) 踊りの修行
(「しゅりけんになんじゃ」の曲に合わせて踊ったり、手づくり楽器をならしたりする)
- (5) 手裏剣キャッチ
(ぶら下げてある好きな手裏剣をジャンプして取り、それをプレゼントする)

①「3歳児の気もちに気づき、考えて行動する」

手裏剣キャッチのコーナーは、自分で選んだ手裏剣をプレゼントしてもらえるので、3歳児が喜んで並んでいる。手裏剣がなくなると、G女(4歳児)が新しい手裏剣を洗濯バサミにはさむ役をしている。

そこへ、順番が回ってきたH女(3歳児)だが、困ったような表情でじっとしている。G女(4歳児)が「順番きたから取ってもいいよ」と言っても、一向に取ろうとしない。「こうやって取るんだよ」とジャンプしてやり方を見せても、動かない。「やりたくないの?」と聞くと、首を横に振る。G女(4歳児)は困ってしまい、側で見守っていた教師の目を見て“どうしよう”という表情をしている。

そこで、「Hちゃん(3歳児)、どの手裏剣が取りたいの?」と教師が聞くと、「これじゃないのがいい」と小さな声で3歳児が答える。「そうか。好きな手裏剣がなかったんだね。どうしようか?」とG女(4歳児)に尋ねると、「じゃあ、この中から選んで。それをつけてあげるから」と予備の手裏剣がたくさん入った籠を3歳児の前に差し出した。すると、3歳児は笑顔になり、「これ」と1つ選ぶ。G女(4歳児)が早速洗濯バサミではさみ、ぶら下げると、張り切ってジャンプして取る。G女(4歳児)に「それは、プレゼントだから持って帰っていいよ」と言われ、笑顔で次のコーナーへ移っていった。

【考察】

事例①では、3歳児がやりたいけれどもやろうとしない理由を、G女（4歳児）なりに相手の立場に立って考えようとしていた。教師は、その場面を性急に方向づけるのではなく、G女（4歳児）と一緒にまずは受け止めながら見守った。そして、行き詰まった時に、教師は3歳児の内面の思いを引き出し、どうしたらよいかを再びG女（4歳児）に問いかけていった。そのことで、G女（4歳児）は最後まで自分で考えて3歳児のためにかかわることができ、自信となっていった。

このように、異年齢のかかわりには、困ったり、思うようにならなかつたりすることも出てくる。そのため教師は、子どもと共にこうした葛藤を受け止め支え、子どもたちがそれを乗り越える体験になるようにしていくことが大切である。



図3 手裏剣つけてあげるからね

②「自分なりにかかわろうとする」

踊りのコーナーでは、4歳児が3歳児の前に立ち、お手本になって踊りを教えている。

その様子を少し離れてE女（4歳児）が堅い表情で見ている。よく見ると、手足を少し動かして踊っているようである。教師が「Eちゃん（4歳児）も、もも組さん（3歳児）に踊りを教えてあげてるんだね」と声をかけると、にこっと笑い、少し表情が和らぐ。そしてその1曲が終わると、2、3歩近寄っていく。

しばらくして再び見ると、E女（4歳児）が4歳児側の列の1番端で踊っている。その表情は、なんともうれしそうであった。



図4 こうやって踊るんだよ

【考察】

E女（4歳児）は、普段、積極的に人にかかわったり、踊って表現したりすることが苦手で、異年齢の中では、じっと固まってしまうことが多かった。事例②でも最初E女（4歳児）は、お客さんとしてきた3歳児にかかわりたいけれど、一歩引いて離れて踊っていた。教師はその姿をE女（4歳児）なりに3歳児にかかわろうとしている姿であるととらえ、その教えたてい思いを認めていくことで、自分から輪に入り、最後は生き生きと踊る姿が見られた。

このように、4歳児の中には、3歳児にかかわりたい気持ちはあるが、すぐに積極的にかかわることができない場合もある。教師はかかわりをつなげることを焦らず、一人ひとりのペースに寄り添いながら、思いを認めていくことで、安心して異年齢の中でも自分の思いを伝えることができるようになっていくと考えている。

③「意図的な異年齢交流で育まれた人とかかわる力がその後の生活にいきっていく」

忍者ランド後の自由な遊びの片付けの時である。園庭で3歳児が、4輪車を片付けようとしている。しかし、3歳児1人では、重たくてペダル

が動かない。すると、その様子に気づいたE女（4歳児）がさっと駆け寄り、4輪車を後ろから押し始める。一気に車が動き始め、3歳児も満面の笑顔でうれしそうである。最後まで、2人で協力して片付けられると、3歳児は満足し、走って帰っていった。

教師は、E女（4歳児）に「Eちゃんが、車を押したら、もも組さん（3歳児）にこにこ顔になってたよ。Eちゃんが手伝ってくれて、うれしかったんだね」と言うと、照れたように笑っていた。

【考察】

事例③は、E女（4歳児）が、幼稚園生活で初めて自分から3歳児を助けようと積極的に行動した場面であった。忍者ランドでの異年齢のかかわりを通して、3歳児に踊りを教えることができたという達成感が、自信となり、年下の3歳児に自分からかかわろうとする意欲を生み出していったと考えられる。このように、意図的な年下との異年齢交流で身につけた4歳児の人とかかわる力は、その後の幼稚園生活での自然な異年齢のかかわりの中で発揮されていくことが分かった。

またこれは、4歳児の春から秋にかけて5歳児との異年齢交流で5歳児から優しく接してもらった経験を繰り返して、異年齢でのかかわり方を学び、憧れの気持ちを育んできたことや、その経験を積み重ねた4歳児の冬に3歳児と異年齢交流を行ったからこそ、見られた姿であると考えられる。そのため、教師は、異年齢の教師と連携を取りながら、年間を通して3・4・5歳児、それぞれの発達段階に適した時期に子どもの興味を大切にしながら異年齢交流を行っていくことが大切である。

6 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、3歳児・5歳児との異年齢交流を通して、4歳児の人とかかわる力を育てるための環境・援助について大切な点が次のように明らかになってきている。

①異年齢でのかかわり合いが自然に起こるように環境構成を工夫する。

幼稚園では、意図的な異年齢交流だけでなく、好きな遊びの時に起こる自然な異年齢交流も大切にしている。実践例1では、4歳児の“5歳さんみたいに落ちない泡をつくってみたい”という憧れの気持ちを大切に、5歳児の担任と連携を図りながら、学年別だった石けん遊びコーナーを合体し、4・5歳児と一緒に泡づくりができるような環境を工夫した。その結果、5歳児が4歳児に自然に教える姿や4歳児が5歳児のまねをしながら、遊び込んでいく姿が見られた。このように異年齢で遊ぶ中で、年下の4歳児は、年上の5歳児に対して憧れの気持ちをもってかかわり、5歳児は、4歳児に対して思いやりの気持ちをもってかかわる中で、人とかかわる力が育まれていくと考えている。そのため、5歳児のより豊かな遊びに刺激を受けて、やってみたいという気持ちをもてるように、異年齢でのかかわり合いが自然に起こるような環境構成の工夫を行うことが大切である。

②新しい環境や異年齢の友だちにかかわることができるように、寄り添い、友だちとのかかわりをつなぐ言葉かけをする。

異年齢同士のつながりは、まず身近な環境や友だちに一步踏み出してかかわることから始まる。しかし実際には、実践例1-①や3-②のように、“やってみたいけど年長組さんがたくさんいるな”“3歳さんに教えてあげたいけど自信がないな”と躊躇して一步踏み出せない姿も見られる。そのため、教師はこの躊躇する気持ち乗り越えられるよう、やってみたい、かかわりたいという気持ちを受け止め寄り添いながら、友だちとのかかわりをつなぐ言葉かけをしたり思いを代弁したりして、安心感をもって自分なりにかかわることができるようにすることが大切であると考えられる。

このように子どもたちは教師を心の拠り所としながら自分からかかわることで、遊びの中で安心して自分の思いを出し、その子らしさを発揮するようになると考えている。

③葛藤を乗り越えることができるように、子どもと共に状況を受け止め、支える。

実践例3-①では、3歳児の思いを理解しようと様々な方法を試みるが、なかなか原因が分からず困ってしまう場面があった。

このように異年齢のかかわりには、困ったり、迷ったり、思うようにならなかつたりすることも出てくる。このような葛藤の場面こそ人とかかわる力が育まれる大切な機会ととらえる必要がある。ここで大切なのは、異年齢交流の中で新たに生じた場面を、教師が性急に方向づけるのではなく、子どもたちと一緒にまずは受け止めてみることである。教師は子どもと共にこうした葛藤を受け止め支え、子どもたちがそれを乗り越える体験にしていく必要がある。このような体験を通して、子どもたちは少しずつ自信をもち、自分からいろいろな人とかかわろうとするようになっていくと考えている。

④友だちへの優しいかかわりを見守り認めていくことで、自信をもってかかわろうとする意欲を育む。

実践例1と3では、年長児に優しく接してもらったことと同じように同年齢の友だちや年下の3歳児に教える姿が見られた。同年齢や3歳児のために考えて行ったことを教師が認めると、その後の生活でも自信をもってかかわろうとする姿が見られていった。

このように4歳児は、年上の5歳児に優しく接してもらった経験から人とかかわり方を学んでいる。その学びを4歳児同士のかかわりや年下の3歳児とかかわりで発揮できるように、教師が4歳児なりのかかわり方をあたたかく見守り認めていくことで、自信をもってさらにかかわってみよう、思いを伝えてみようという意欲を育むことが大切である。

7 おわりに

今回の研究は、異年齢交流を通して4歳児の人とかかわる力を育むことをめざしてきた。

年間を通して異年齢交流を積み重ねる中で子どもたちが変わってきたことは、最近、子どもたちの口から「ゆり組（5歳児）の〇〇ちゃんにこんなこと教えてもらったよ」「もも組さん（3歳児）を助けてあげたよ」などという言葉がよく聞かれるようになったことである。実際に、知りたいことを仲良くなった5歳児に自分から聞きに行く姿などが見られるようになった。また、「もも組さん（3歳児）が使いやすいように」とつぶやきながら丁寧にままごとの片付けをしたり、困っている3歳児に自分からかかわったりする姿が見られるようになった。このように、異年齢交流で培った人とかかわる力を普段の遊びや生活の中で生かしていく姿が見られるようになってきたのである。

このような子どもの姿から、人とかかわる力は、意図的な異年齢交流を一度行ったからすぐに育つものではなく、発達を見通しながら年間を通して交流を積み重ねる中でこそ生まれ、それが自然な異年齢交流に生かされていくことが分かった。また異年齢交流を通して人とかかわる力を育てることが、一人ひとりの育ちにつながるということを改めて実感することとなった。

今回は異年齢交流を通して考えてきたが、今後も、人とかかわる力の育ち、一人ひとりの子どもの育ちを様々な角度から追究していきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」p.138, 2008, フレーベル館.
- 2) 文部科学省Web ページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/030/shiryu/06022009/005/001.htm
- 3) 中山英充子：「広島大学附属三原学校園研究紀要 第3集」, pp.25-32, 2013.
- 4) 白石恵理子：「4歳児」, pp.34-35, 2010, かもがわ出版.